

日本における内的作業モデルに関する研究の 現状と今後の展望

内田 利広・河合 三奈子^{*}・大田 千登世^{**}・大東 映美^{***}

Present state and future prospects of research on the Internal Working Model in Japan

Toshihiro UCHIDA, Minako KAWAI^{*}, Chitose OHOTA^{**} and Emi DAITHO^{***}

Accepted June 28, 2010

抄録 : 本論は、ボウルビィ (Bowlby) の愛着理論を起源とする内的作業モデル (Internal Working Model : 以下, IWM) に関する研究について、現状の考察と今後の展望を行ったものである。IWM の文献については、すでに内田ら (2003) においてそれまでの文献の展望を行ったが、今回はその後の文献を中心に、特に幼児における IWM の測定の問題や行動特性との関連、IWM と虐待や発達障害との関連とその支援、青年期における IWM とパーソナリティ特性や対人関係との関連、さらに IWM の変容や世代間伝達の問題を取り上げ、考察を行った。

索引語 : 内的作業モデル (IWM), 愛着, 母子関係, 虐待, 世代間伝達

Abstract : The aim of this paper is to examine the present state and future prospects of research related to the Internal Working Model (IWM), which traces its origins to Bowlby's theory of attachment. Developments in the research literature concerning IWM have already been reviewed by Uchida et al (2003), however, this paper focuses mainly on literature published since 2003, examining topics such as the issue of IWM assessment and its relation to behavior characteristics in infants, links between IWM and abuse or developmental disabilities, the relationship between adolescent IWM and personality characteristics and interpersonal relations, and transformations in the IWM and the issue of intergenerational transmission.

Key Words : Internal Working Model (IWM), attachment, mother-child relationship, abuse, intergenerational transmission

^{*} 八幡市福祉センター

^{**} 滋賀県中央子ども家庭相談センター

^{***} 大村共立病院

1. はじめに

本論は、ボウルビィ (Bowlby) の愛着理論を起源とし、その後母子の愛着関係によって形成されると考えられる内的作業モデル (Internal Working Model : 以下, IWM と略) に関する研究について、まとめたものである。IWM の文献については、すでに内田ら (2003) においてそれまでの文献の展望を行っているが、今回はその後の文献を中心に、幼児における IWM の測定の問題や行動特性との関連 (担当大田)、IWM と虐待や発達障害との関連とその支援 (担当河合)、青年期における IWM とパーソナリティ特性や家族を含めた対人関係との関連 (担当大東)、さらに IWM の変容や世代間伝達の問題 (担当内田) を中心に取り上げ、その現状や今後の課題について考察を行った。

2. 幼児の愛着と行動特性及びその要因

1. 幼児の IWM 測定の現状

青年期になると、質問紙法や面接法を用いて IWM を測定することが可能となる。しかし、幼児の IWM の測定については、保育者等が質問紙に答える形で間接的に評定しているものが多い。粕谷ら (2003) は、現場で保育者が IWM を測定し、幼児理解を進めるための評定項目の作成を試みている。IWM のタイプ別での行動特性などをもとにして、回避型、安定型、抵抗・アンビヴァレント型の 3 タイプの幼児の行動に関する行動評定項目を作成した。その結果、評定項目として、安定型と不安定型の 2 つの因子が見出され、それらと思いやり行動、攻撃性行動の関連を示唆する結果を得ている。ただ、粕谷ら (2003) では、今後の課題として、年齢が異なる幼児を同じ項目で評定することの問題や、作成した項目による評定が幼児の IWM を把握することになっているかなどの妥当性について検討していくことも挙げている。

間接的に評定する方法だけでなく、直接的に幼児の IWM を測定する方法も開発されてきている。山川 (2006) によると、直接的に測定する方法としては 3 種類の方法に大別されるようである。第 1 に絵画を使用する方法 (子どもに愛着に関する場面を描いた絵画を見せ、そこに描かれている子どもがどのような気持ちであるか、そして、その子どもがどう思うかを答えさせる方法)、第 2 に子どもに絵 (家族の話) を描かせる方法、第 3 にドールプレイ (子どもに愛着に関するテーマで人形を使って話を作らせる方法) である。第 1 の方法については、久保田 (1993) の研究がある。久保田 (1993) は、IWM 研究の方法として、「幼児・児童絵画統覚検査 (C.A.T. 日本版)」の図版の一部を用いることの妥当性を検討している。また、叙述されたストーリーから幼児のアタッチメント人物及び自己についての IWM に関しても検討を行った。詳細は、内田ら (2003) で述べられているが、結果として IWM を推定する方法として、C.A.T. 日本版 (図版 3) がほぼ妥当であることが示唆されている。また、第 3 の方法であるドールプレイは、アメリカにおいて使用されており、日本ではこれまであまり使用されていない。山川 (2006) は、これまでアメリカにおいて IWM の測定に使用されていた Attachment Doll Play が日本の幼児においても使用できるのかどうかを検討している。そして、ドールプレイを実施するだけでなく、母子分離の後、再会した時の様子もビデオで記録した。その結果、日本においても特に原版と変更なく実施することが可能であることが示唆された。また、ドールプレイで測定された IWM と母親との再会場面による IWM のタイプの一致について検討した結果、高い一致度が見られ、IWM

の測定法として、ドールプレイの実施には妥当性が示唆された。山川（2006）は妥当性が示唆されたドールプレイを用いることで、以前よりも短いスパンで愛着の連続性について検討することや様々な社会文化背景をもつ子どもの愛着を調査することで、幼児期の愛着の性質を明らかにしていくことの必要性についても述べている。ただ、このドールプレイの実施は日本では未だ少ないのが現状である。ドールプレイだけでなく、直接的に幼児の IWM を測定する方法を使った研究は少ない。これには、その方法が一般化されていないことが挙げられ、方法を学ぶ難しさがあるだろう。今後は、これらの方法が確立され、直接的に幼児の IWM を測定する方法が広まっていくことが期待される。

2. 幼児の IWM と行動特性

幼児の問題として挙げられる行動に、攻撃行動・母子分離のできなさ等が考えられる。これらは共に、母親などの養育者や保育者にとって、大きな問題であろう。桂田（2005）は、幼児の攻撃行動と愛着の安定性、母親の養育行動の関連を検討している。その際、幼児の攻撃行動を母親と保育者が同じ指標で別々に評定した。その結果、保育者の評定した幼児の攻撃行動と幼児の IWM や母親の養育行動には有意な関連は見出されなかったが、母親のネガティブな養育行動は子どもの攻撃行動や IWM の不安定性を高め、この不安定な IWM が攻撃行動の要因となっていることが示された。また、辻野ら（2008）は子どもの問題行動が生じる原因の重要性を考え、子どもの問題行動と母親の子どもへの愛着との関連性を検討している。この際、桂田（2005）と同様、母親と保育者が子どもの行動の評価を同じ指標でそれぞれが評定した。その結果、子どもの行動は欲求不満行動、集中力の欠如、反抗的態度、怠惰行動の 4 因子が抽出された。その 4 因子の中で母親が評定した欲求不満行動において、愛着高得点群は愛着低得点群よりも欲求不満行動得点が有意に低かった。母親と保育者が別々に子どもの行動を評定したが、結果として、保育士評価による子どもの行動は母親の愛着とは関連が示されず、母親評価による子どもの行動が母親の愛着と関連していた。この結果から、辻野ら（2008）は子どもの問題行動は母親の子どもへの愛着と関連していることを示唆し、子どもは自分の心的状態を問題行動として表出し、母親の愛着を求めていると述べている。

母子分離と IWM の関連の研究としては、尾崎（2003）のものがある。尾崎は、週 1 回開催される親子教室に参加している 2・3 歳児が母親から離れて仲間集団に参加する経過を観察し、母子分離の状況を過分離型・徐々分離型・一定分離型・不分離型の 4 つの型に分類した。そして、それらの各母子分離型における子どもの IWM の安定性と気質の特徴を調べ、母子分離に影響を与える要因を検討している。母子分離型と IWM の関連を調べた結果、IWM が安定していたのは、徐々分離型と一定分離型であり、何か困難な状況に直面した時には、母親の元に戻るという行動を示し、母親が安全基地として機能していたことが考えられる。それに比べ、IWM の安定性は過分離型と不分離型で低かった。これは、過分離型の子どもにとっては、母親が安全基地として機能していなく、不分離型の子どもにとっては、分離不安が大きかったと考えられる。ただ、同じように IWM の安定性が低い過分離型と不分離型であっても、母子分離の様相が正反対であったのは、“新奇場面の反応と不順応性”という気質の違いがあったとされている。これらから、母子分離には IWM の安定性と子どもの気質が相互に関係して特徴づけられることが示唆された。

これらのことから、幼児の問題として考えられる攻撃行動や母子分離のできなさや幼児の IWM には関連があることが示されてきている。幼児は、自分の思いを言葉で表現することが難しい分、行動として表現している。不安定な IWM をもつ子どもは、自分の心的状態を問題行動として挙げられる攻撃

行動や分離のできなさなどの行動として表現しているように思われる。最近では、幼児を対象とした IWM の研究が増加している傾向にある。研究目的に応じて IWM を直接的あるいは間接的に測定した上で、行動特性などとの関連を研究し、幼児の行動がもつ意味の中に、IWM の視点を含むことは必要であろう。

3. 母親から子どもへの IWM 形成の要因

母親から子どもへの IWM 形成の要因としては、金子ら（2004）が母親の要因・子どもの要因・社会環境要因の 3 つに大別して研究を行った。子どもの要因としては、子どもの障害、子どもの気質の問題などが挙げられる。ここでは、これらの要因の中の、母親の要因と社会環境要因の 2 つの要因を取り上げて検討する。

金子ら（2004）は、母親の要因として妊娠に対する態度を挙げている。妊娠は親子関係の始まりと考えることができ、妊娠に対する態度が肯定的でないことは、親子関係の開始時点から不安定な IWM を形成する要因となる可能性を示唆している。妊娠中の出産や育児に対しての不安と子どもへの愛着との間に関連があることも示されていて、妊娠中の不安を感じる母親は、出産後の子どもへの愛着が低くなるようである。母親の精神状態も子どもへの愛着には影響を及ぼしているとし、母親が比較的発症しやすいものがうつ病である。産後うつ病を発症する母親も近年では増加してきている。また、笛吹（2003）は、幼少期からこれまでに培われた愛着関係と精神的健康度の関連を検討し、不安定な IWM を有する母親の方が、安定した IWM を有する母親に比べ、妊娠初期における出産育児に対する不安感や、全般的な抑うつ傾向が高いことを示している。

これらから、幼少期からこれまでに母親が形成した IWM が不安定なものであると、妊娠中に出産や育児に対して不安を感じたり、抑うつ感を感じ、その結果、出産後の子どもへの愛着も低くなるというようなサイクルを描いていると考えられる。また、社会環境要因としては、夫婦関係の良さや周囲からのサポートの有無が指摘されている。パートナーとの関係を安定したよいものと認識していて、パートナーからのサポートを得られている場合は、子どもへの愛着を築いていく心理的余裕をもつことができると考えられる。

加藤（2007）は、乳幼児の養育者を対象に、IWM と重要な人物からのサポート関係を検討している。その結果、出産前には不安定な IWM を有していたが、現在は安定型の IWM を形成していると認知している養育者は、他の養育者に比べて、幸福感を高く感じていて、重要な人物からのサポートを十分に受けていることが示された。

これらの要因を合わせると、母親自身がこれまでの生活歴の中で培った IWM が子どもへと影響を及ぼしていることが窺われる。IWM が不安定なものであるほど、将来的に産後うつ病などを発症していく可能性も考えられる。ただ、夫婦関係や家族関係の良さやサポートを得られていると、安定した IWM へと変容することもあり、IWM が不安定な母親に対しての妊娠早期からのサポートは欠かすことはできなく、臨床的な介入が行われる必要性が感じられる。また、これまでの研究は、母親を対象に検討を重ねてきたものが多いが、今後は、父親の要因も視野に入れて検討を行っていく必要がある。

これまで述べたように、様々な要因が重なりあって、養育者から子どもへと IWM が形成されるが、IWM の形成過程の中で重要な他者に会うことで修正することが可能だという研究も行われてきている。上田（2002）は乳幼児を対象に、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な幼児がその後も不安定な対人関係を築くということは必ずしもないとの考えから、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な

乳児が、保育者との間に愛着関係を形成する過程、およびその愛着関係の変容過程について検討している。保育所の1歳児クラスの乳児の母親に母子間の愛着測定尺度を実施し、その結果から第一愛着対象者との愛着関係が不安定な幼児と、安定した幼児を研究の対象とし、対象児と保育者、観察者、初対面の人それぞれとのやり取りを9ヶ月間、縦断的に観察した。その結果、対象児1名の結果ではあるが、その対象児が第一愛着対象者の代理としての保育者との間に愛着関係を形成させ、徐々にその愛着関係が安定していくことが示された。ただ、9ヶ月間という限られた観察期間であったことから、対象児と保育者との関係が安定していくことは示されたが、対象児と第一愛着対象者との関係が安定するのかという点までは示唆されなかった。ただ、その可能性は示され、今後さらに検討していくことを通して、対象児と第一愛着対象者との関係の改善についても検討することは課題として残されている。

3. 乳幼児期の愛着形成について ―虐待・発達障害を中心に―

1. 愛着と虐待

近年、子ども虐待の増加が問題視されている中、愛着やIWMの視点からそうした問題を捉え、さらには、虐待を受けた子どもに対するケアについて検討された研究が増えてきている。

まず、虐待が起こる背景の一つとして、母親自身の精神的な問題が挙げられるだろう。鈴宮ら(2004)は、母親の産後うつ病に関する実態調査において、産後うつ病スクリーニングの区分点を超える高得点群の母親は、赤ちゃんに対して拒絶や怒りなどの否定的な気持ちが強く、愛着を感じにくく、虐待のリスクが高いことを示している。こうした母親の不安定さが虐待的な行動につながる前に、母子訪問などより早い時期からの支援が重要だと考えられる。

虐待を受けた子どものアタッチメントの特徴については、「無秩序・無方向型アタッチメント(disorganized / disoriented attachment)」という概念から捉えることができる。無秩序・無方向型アタッチメント(Strange Situation Procedure: SSPでのDタイプ)とは、数井(2007)によれば、恐れや不安の感情調節の機能不全や認知機能の歪曲を内包しており、アタッチメントにまつわる多様な要素が組織化されずに混乱している状態だとされる。このタイプの子どものSSP場面における具体的な行動特徴について、遠藤(2007)は以下のようにまとめている。まず、近接と回避という両立し得ないような行動が同時に、あるいは継続的に見られること、不自然でぎこちない動き、タイミングのずれた場違いな行動や表情、突然すくんだり、うつろな表情を浮かべじっと固まって動かなくなること、何をしたいかどこへ行きたいか読み取りづらい、養育者の存在におびているような素振り、などが挙げられる。合わせて、そうしたタイプの子どもの養育者については、精神的に不安定なところがあり、突発的に表情や言動に変調をきたし、パニックなど子どもをおびえさせるような行動を示す、虐待行為を含めた不適切な養育、ストレスに対して脆弱で無力感に浸りやすい、情緒的に引きこもりやすい、といった養育者像が推察されている。Carlson et.al.(1989)は、被虐待児の82%がこのDタイプに分類されたと報告している。

山川(2005)は、Attachment Doll Playを用いて年長児のアタッチメントを分類した上で、特にこのDタイプの子どもの目に注目し、その検討を行っている。その結果、Doll Playに表れたDタイプの子どもの表象には、愛着対象に対する恐怖のために防衛機制がうまく働いておらず、混乱した制御不能な話

や、話を作ること自体を拒否する様子が示された。また、このタイプの子どもは、励ましや援助を求める場面で母親を選択することが他のタイプの子どもと比較して少ないこと、母親自身もまた、そうした子どもの愛情を求める行動に対する許容度が低いことがわかった。このタイプの子どものその後の発達においては、行動上の問題や精神病理など、臨床上深刻な問題が発生することが示唆されており（Carlson, 1998 など）、今後の詳細な検討、さらには臨床場面でのアプローチについての研究が望まれる。

虐待を受けた子どもに対する、アタッチメントの視点からの具体的な介入事例については、土井（2003）が報告している。養育者から虐待を受けて施設入所となった児に対して、Bowlby の愛着理論に基づき、日常生活場面での愛着形成を目的とした治療的介入を行っている。その中で、特定の他者との「肯定的・好意的な一定の言語的強化子」や「抱っこを主とする身体的接触強化子」の繰り返しの伴う関わりによって、集団養育の場で被虐待児の愛着が形成されていく過程について検証されている。

また、藤岡（2003）は、虐待を受けた子どもへのケアと新たな親子関係の構築に向けた有効な援助法として、「修復的愛着療法」を取り上げている。藤岡（2003）によれば、修復的愛着療法とは、愛着療法と家族療法を統合させた療法で、Levy, T.M. & M. Orlans（1998）によって研究・推進されてきた。その要素としては、愛着障害を持つ子どもの理解を深めること（内的な心理的力動を含めて）、親としての重要な技能の教育、子どもとの強い情動のワーク（作業）が挙げられている。さらに藤岡（2003）は、世代間伝達を断ち切るために親自身の愛着関係の見直しや、夫婦面接による夫婦の絆の再構築についても付け加えている。具体的には、2 週間のトリートメントプログラムが体系化されており、その中で様々な技法やワーク（例えば、腕の中でのホールディングやロールプレイなど）が行われ、子どもと養育者との愛着関係の形成をサポートする。日本での適用についてはいくつかの課題があり、例えば、ワークの中での身体接触が、日常生活で身体接触が多用されない日本文化では抵抗感が少なく、日本に合ったアレンジが必要なこと、また修復的愛着療法の大きな特徴の 1 つである複数セラピスト体制が、個別面接を基本とすることの多い日本では難しいこと（保険制度も含めて）などが挙げられている。しかし、愛着療法の日本の臨床場面の適用は、虐待だけでなく非行や不登校、軽度発達障害なども含め、親子関係へのサポートが必要な他の領域においても、重要な役割をとる可能性が示唆されている。

2. 愛着と発達障害

子どもが親との安定的な愛着関係、さらには安定した IWM を形成していく上で、その過程がスムーズに運びにくいケースの背景の 1 つに、発達障害が考えられる。本章では特に、その中核的障害が社会性の障害だと考えられている自閉症について取り上げる。自閉症以外の障害をもつ子どもにおける愛着に関する研究が、1970 年代から 80 年代前半までに行われているのに対し、自閉症と愛着について本格的に検討されるようになったのは、1990 年代前後である（別府, 2007）。この遅れは、自閉症児にとって愛着関係を築くのは困難だと考えられていたことが影響していると思われる。

しかし、SSP などを用いたその後の研究により、自閉症児も健常児と同様に、養育者を区別して愛着行動を示すことがわかってきた。伊藤（2002）は、自閉症児の愛着を縦断的に検討し、他の障害を持つ子どもと比べて遅れはするものの、自閉症児も認知発達に伴い、安定した愛着を形成していくことを明らかにしている。

この際に特記すべきこととして、自閉症児の愛着の「質」に関する視点が挙げられる。つまり、自閉症児の示す愛着と健常児が示す愛着が同じであるかどうか、ということであるが、これについて伊藤（2002）は、健常児は愛着対象を「心理的安全基地」として求めるが、自閉症児は要求を充足してくれる「道具的安全基地」として捉えていることなど、その質の違いについて指摘している。さらに榊原・別府（2005）は、自閉症児が、こうした自閉症児特有の「道具的安全基地」としての愛着を示す段階から、その後の関わりにおいて「心理的安全基地」としての愛着を形成できた過程について報告している。これによると、セラピストへの「心理的安全基地」としての愛着が形成された時期以後に、保育場面でも保育士の働きかけへの応答や、保育士を介した他児との関わりが増大したことも記述されており、家族だけでなくそれ以外の他者という、複数の大人と安定した愛着関係を形成することにより、IWM が形成された可能性を示唆している。

別府（1994）は、自閉症児の愛着形成の段階として、特定の養育者との分離不安を示し、特定の養育者以外を拒絶する「密着的接近」の段階、不安や不快になった時に自分を快の状態にさせる具体的行動を愛着対象に求める「不安・不快な場面で求める関係」の段階（伊藤（2002）の「道具的安全基地」に相当する）、そして、愛着対象に対して具体的な行動を求めるだけでなく、愛着対象を支える「不安・不快な場面に立ち向かう安全基地としての役割」の3段階を挙げている。狗巻（2007）は、こうした段階ごとの療育上の留意点について述べた上で、今後はさらに第4段階として「集団への参加・他児との関係」という側面から考察していく必要性を唱えている。

3. 支援に向けた今後の展望

養育者との安定的な愛着関係が形成されにくいために、その形成に向けたアプローチが重要視されている2つの領域—虐待と発達障害—について、その先行研究を概観した。どちらの領域においても指摘されているのは、より早期の臨床的介入・支援の重要性だと言える。

虐待の領域において、具体的な介入方法を検討した研究は日本ではまだ多くはないが、Prior, V. & Glaser, D. (2008) は、愛着障害へのアプローチとして、愛着理論に基づく数々の具体的な介入研究をレビューしている。その中で、まず養育者と子どものやりとりにも焦点を当てた介入が重要であり、特に養育者の感受性に焦点を当て、それを高めていけるような心理教育的アプローチや治療が有効だとまとめている。さらに、虐待のために実の親とは離れ、養子縁組などにより養育者が交代したケース研究において、その効果がいくつも実証されているが、代わりの養育者に対するサポートの必要性についても指摘されており、こうした親が、①子どもの中では愛着に関する内的表象が持続しており、それに基づいて引き続き問題を抱えることを理解できるように、②子どもの反応へ応答する時に感受性を持って応答を調整できるように、ガイダンスやサポートすることが必要だとしている。加えて、このように養育者に働きかけることで、子どもの愛着の安定性が高まったとしても、子どもが他の領域（身体的健康や行動・行為、仲間関係、学習、情動的状态など）で問題を示す可能性もあり、子ども自身への個人療法等の有効性もまた想定されている。ただ、愛着理論に基づいた子どもへの直接的介入について、系統的に評価した実証研究はまだ数少なく、今後の研究の展開が望まれている。

発達障害の領域においては、山上（2007）が、自閉症の理解と支援における今後の課題に関する記述の中で、愛着形成の「臨界期」という視点から、早期支援の重要性を以下のように述べている。様々な先行研究から、自閉症児が安定した愛着関係を築いていくための支援は緊急性が高く、早期療育が症状の改善につながるということが明らかになってきているが、それでも社会性に関する中核的な症状は残

る場合が多いと言われる。ここに、発達上の臨界期の問題があると考えられる。通常、特に8ヵ月～1歳頃は重要な発達上の質的転換が起こる時期と捉えられており、間主観的な交流が可能になり、母子の情意的関係の発達、また外界への関心の育ちから認知面においても大きな発達をとげていく。加えて、神経発達学的にも、この時期は脳内各部の連絡路が急速に発達する時期だとされている。Spitzが「8ヵ月不安」を指摘した、母子の愛着関係が形成されるこの時期、さらに精神機能の様々な領域で発達上の質的転換が起こるこの時期に、自閉症児に発達促進的な環境を整えることが大切だと考えられる。問題が固定化し、自閉症の特異的な脳の発達や情報処理システムがすでに固定化されている幼児期や学童期以降に、上記のような発達を同質に獲得するのは困難だと考えられるため、より早期での発見や療育システムの確立が望まれるのである。

4. 青年期における IWM 研究

1. IWM とパーソナリティ特性との関係

成人愛着理論は、親密な関係における認知・感情・行動の個人差を説明するために Bowlby (1973) の愛着理論を拡張する形で発展してきた。わが国においては、成人愛着研究を行う際、3分類モデルに基づく愛着スタイル尺度(訖摩・戸田, 1988)や Bartholomew (1991) が分類した成人愛着の4型が参考にされることが多い。3分類モデルに基づく愛着スタイル尺度とは、Ainsworth et.al. (1978) の幼児の三つの愛着分類にもとづき、安定型 (Secure)、アンビバレント型 (Anxious/ambivalent)、回避型 (Avoidant) という3分類を成人においても仮定するものである。また、成人愛着の4型とは、安定型 (Secure)、拒絶・退却型 (Dismissing)、とらわれ型 (Preoccupied)、恐れ・恐怖型 (Fearful) を示す。しかし、どの尺度を用いた方がよいのかを判断できないことや、先行研究の結果を比較し議論することが困難な場合もあった。そこで、このような問題を解決するために、Brennan et al. (1998) は、今までに開発された14の愛着スタイル尺度にもとづき“親密な対人関係体験尺度 (Experiences in Close Relationships inventory, 以下 ECR と略す)”を作成し、“見捨てられ不安”と“親密性の回避”という2因子を抽出した。そして ECR は、妥当性と信頼性が確認されかつほとんどの研究者が共通して用いる尺度になりつつある (Crowell Treboux, & Waters, 2002; Fraley, Garner, & Shaver, 2000)。

さらに中尾・加藤 (2004) は、ECR の日本語版を作成するため、ECR の妥当性の検討を行った。その結果、“見捨てられ不安”では、自己観がネガティブであるとらわれ型や恐れ型は、自己観がポジティブな安定型と比べて、得点が有意に高かった。一方、“親密性の回避”では、他者観がネガティブな拒絶型や恐れ型は、他者観がポジティブな安定型やとらわれ型に比べて、得点が有意に高かった。これらのことから、妥当性と信頼性が確認された。また、一般他者版 ECR、親友版 ECR についてもすでに作成されている。さらに島 (2007) の研究では、愛着は Big Five とある程度関連はあるが、異なった概念であることが確認されている。

今後の研究においては、愛着を測定することで、どのようなパーソナリティ特性や対人関係を予測できるのかを確認する必要がある。

2. IWM と家族関係、親との関連

青年期には親や家族からの心理的独立という大きな課題がある。

宮本ら（2001）の家族描画と円環母子関係イメージ画を指標とした研究より、IWMの安定型は家族や母親との心理的な関わりが維持されており、不安定型は分離関係のイメージが多いことが示された。また円環イメージ画は母子関係の無意識的な部分が現されていることが示唆された。この研究の課題としては、家族画は集団的な一斉調査ではなく、個別調査によってラポールを確立した上で行うこと、IWMの想起の妥当性について見直すことなどがあげられる。

Main, Kaplan, & Cassidy（1985）の成人愛着面接研究では、IWMのアンビバレント型は否定的な経験を想起しやすいと考えられていたが、山岸（2004）によると、生育の過程で母親や友人との関係に問題や葛藤があると認知しているかどうかは、現在の絆組みとの関連が薄く、現在の不安絆組みとの関連も見られなかった。これは、山岸の研究の葛藤関係が、愛情欲求や分離不安だけでなく、反発・反抗や厳しく統制されていることへの不満感も含んでいることが関連していると考えられる。つまり、反発や統制への不満は、IWMの絆組みではとらえきれないといえるだろう。また山口（2004）のパラサイト・シングルと親子関係についての研究では、女性は相対的に親への愛着度や家族との情緒関係が高いことが明らかになった。しかし、この調査は子どもからみた親子関係であり、今後は親からみた親子関係も明らかにする必要がある。

さらに丹羽（2005）は、親への愛着を測定する尺度を作成し、愛着不安と愛着回避の2因子を得た。そして親への愛着不安の低い方がストレス状況における孤独感と対人関係不安を緩衝していることが示唆された。

これらの研究から、愛着を測定する尺度では、親子関係のすべての側面をとらえることは難しいが、投影法や愛着不安の高低による比較などを組合せることで、考察は可能だといえる。また、親子関係をとらえる際は、子ども側だけでなく、親側の視点も取り入れる必要がある。

3. IWMと対人行動・対人関係との関連

Bowlby（1969）は、幼児における愛着行動の理論化を行い、愛着パターンが幼児の愛着行動と母親（愛着人物）の愛着行動との相互作用の質に応じて形成されると想定した。それならば、成人の愛着プロセスを解明するためには、まず成人の愛着行動を分析する必要があるだろう。

そこで、中尾・加藤（2001）は、愛着行動の記述を女子大学生から集めた。その結果、ネガティブな感情は、イライラ、不安、悲しみなどであり、Bowlbyから想定された反応は全体の37.72%であった。また愛着人物は、友人（60.98%）、家族（17.89%）、恋人（13.82%）の順に多かった。成人の愛着行動は主に会話を介して行われ、幼児のみならず成人でも、愛着人物との距離が近い状態で愛着行動が行われると示唆された。この研究の課題としては、被験者が女性のみであること、愛着スタイルごとに愛着行動が異なるかを検証していないことがあげられる。

また大石・小林（2006）の研究では、IWMのアンビバレント傾向では育児への不安感に正の相関、回避傾向では子どもへの愛着・受容、親になることに対する期待感に負の相関が認められた。アンビバレント傾向の場合、人間関係に自信が持てず、育児に対しても不安になり、回避傾向の場合、親とは不安定な愛着関係であり、この傾向が次の世代へと引き継がれていくのかもしれない。しかし、幼児期の愛着関係とは不可逆的なものなのだろうか。

嶋田・田中（2005）の研究では、アタッチメントのスタイルが幼少期の母親へのアタッチメントの質によって不可逆的に決定されるとまではいえなかった。むしろ他者との間で何らかの変化がもたらされるような経験をし、その変化がポジティブなものとして認識されることによって、幼少期のアタッ

チメントの安定が低かった者でも、内的作業モデルの安定が高くなる可能性が示唆された。またその変化では「自信・積極性の獲得」が重要であると推測された。なお変化のきっかけとなった他者として、「友達」が全体の半分以上を占めており、「親」や「家族」は上位には入らなかった。中尾・加藤(2001)の研究では、愛着の対象として家族が友人の次に多いが、家族は幼少期から変化せずに存在することが多いため、自信や積極性を獲得できるような“変化のきっかけ”とは考えられないのかもしれない。

さらに中内(2006)によると、自己表象と対象表象との間の相互自律性の発達段階が高い青年は愛着安定型を示す傾向があり、低いものは回避型を示す傾向があるという。また、対象関係の発達の段階を測定するロールシャッハ尺度(MOA: Mutuality of Autonomy Scale)の有効性に対する検討を行った結果、MOAの解釈と愛着スタイルの分類は一致するものであった。これより、MOAによって数量的把握ではもれてしまう個々の内界のありようを現象学的にとらえることができ、対象関係の特質をより鮮明に理解できる可能性が示された。

これらの研究から、幼少期の愛着関係は不可逆的なものではなく、その後に出会う友人や恋人の存在によって、IWMの安定が高くなる可能性があることが明らかになった。そしてそのためには、自己と他者を明確に分離したものとして、相互に自律し尊重しあった存在として認識し適切なバランスを維持する能力の発達が必要であると考えられる。その能力を発達させるためにはどうすればよいのかということについては、今後の課題である。

以上のことから、青年期におけるIWM研究では、幼少期の愛着関係だけに注目するのではなく、その後に出会う友人や恋人の存在を重視していることがわかる。今後の展望としては、IWMの安定を高めると考えられる、自他のバランスを維持する能力の発達に注目し、青年の親側の要因や投影法などとの関連についても詳しく検討していく必要がある。

5. IWMの変容と世代間伝達及び心理臨床への利用

1. IWMの変容

Bowlby(1973)によると、内的作業モデルとは、乳幼児期における養育者との相互作用によって、個人内に内在化される対人情報を処理する対人情報処理のテンプレートである。そして、そのテンプレートが一端出来上がると、以後の対人関係においては、その内在化された内的作業モデルに従って、処理され対応していくことになる。この内的作業モデルの形成は、5歳頃までが非常に重要な時期であり、いったん形成された内的作業モデルは、以降漸次安定していくことで、可逆性が減じていくと言われている。これは乳幼児期に測定したアタッチメント分類を縦断的に成人になるまで追跡したいくつかの研究により、乳児期から成人期への連続性を示唆するものと、有意な連続性を示さなかったものがある。また、有意な連続性を示した研究においてもその一致率は、60%程度であり、完全な一致率ではなかった。つまり、多くの人はそれほど変化せず、一貫した内的作業モデルを形成していくが、何割かは変化する人もいるということである。

この変化のモデルについては、いくつかのものが考えられている。岡島(2008)によると、それは3つのモデルに分けられるということである。

第1は、Fraley(2002)によるプロトタイプモデルである。これは、乳幼児期に形成されたIWMが

プロトタイプとして働き、短期的には変化は生じるがそれはある基準に沿ったものであり、長期的には安定したものであるという考えである。

第2は、ライフストレスモデルである。これは、比較的安定している IWM では、生活環境の変化（ライフイベント）に対する適応として変化が生じるというものである。

第3は、個人差モデルである。ある脆弱性を持つ人は、明確ではないワーキングモデルを発達させ、IWM をよく変動させるというものである。つまり、一部の人が明確な IWM を持たないが故に、アタッチメントの個人差を測定する度に IWM を変化させるような個人によって、変化可能性が示されるということである。このように脆弱性の低い個人は、乳幼児期に内在化したモデルはかなり強固であり、その一方で脆弱性を持ち、明確な IWM を内在化させることができなかった個人の存在が、あたかも IWM が変化しているように見えるというものである。

このように、IWM の変容についてはいくつかのモデルが考えられるが、心理臨床的な視点から考えると、その支援において変容可能であると考えられるなら、それは第2のライフストレスモデルに近いと考えられる。つまり、思春期以降のライフイベントにより IWM の変化が生じたとき、そこには恋人や配偶者などの「重要な他者」の存在が大切であり、特にその他者に対する主観的評価が重要であると考えられる（Crowell et al, 2002）。さらに、岡島はその重要な他者について、恋人や配偶者に加え、親友やセラピストとの関係も考えられると述べており、今後の重要な研究課題になると考えられる。

2. IWM と世代間伝達

愛着の世代間伝達の問題については、渡辺（2000）によって、母子関係における情緒の世代間伝達の問題として取り上げられている。そこでは、家庭内暴力や虐待、育児に困難を来す母親などさまざまな母子関係の障害に対し、母子臨床の視点から、愛着の世代間伝達の鎖を断ち切る治療技法について述べている。

また、この世代間伝達の問題に関する実証的な先駆的研究として数井ら（2000）の研究があげられる。数井らは、日本人母子における愛着の世代間伝達を検証するために、50組の母親と幼児に調査を実施している。その際、母親には成人愛着面接（AAI）から愛着表象を測定し、子どもには愛着Qセット法（AQS）により愛着行動を測定している。IWM に関する注目が集まり、その研究が行われるようになってきたが、そこで常に問題になるのはその測定方法であった。基本的にはこの IWM に関する研究は欧米が先行しており、日本ではその研究を受けて追試的に行われることが多いが、その測定方法が妥当であるかは常に議論のあるところであった。その意味では、この数井らの研究は、海外での AAI の分類の信頼テストに合格した数井、田中を中心とした研究であり、日本で初めて体系的に AAI を用いた研究として位置づけられる。さらに、愛着Qセット法についても欧米での研究を中心に進んでおり、一次元的にその安定性を測定しようとする尺度に対し、愛着は様々な側面が存するのではという疑問も提起されている。それを受け、数井らの研究では、AQS を相互作用の観点や情動制御の観点からいくつかの下位尺度に分け、多次元的にとらえようとしている。結果としては、「親の愛着表象が安定したものである場合、その子どもの愛着も全般的に安定したものになりやすい」ことを明らかにし、さらに子どもの行動特徴や情動特徴との関連でも「F型母親（安定・自律型）を持つ幼児は、相互作用と情動制御の両面において、極めて安定し一貫した特質を示した」と述べ、さらに「U型母親（未解決型）の幼児は、相対的に母親との間で円滑に相互作用をすることができず、情動をポジティブな方向に調整することが困難で制御不能に陥りがちであった」ことを明らかにしている。つまり、安定し

た IWM の母親の子どもは安定しており、不安的な母親の子どもはやはり不安定で情動の制御等がうまくできないという、いわゆる愛着の世代間伝達が実証されたということである。

また、田邊ら（2009）は、愛着の世代間伝達の問題を母親の持っている自己像や内的作業モデルとの関連とともに、母親自身の被養育経験との関連についても検討している。255 名の母親を対象として母親の IWM をはじめ、自尊感情や子育て、夫との関係や親との関係、さらに自身の母親との関係などについて質問紙で調査を行っている。その結果自分の母親との関係において安定し受容的な被養育経験を有している母親は、安定した自己モデルを持ち、子どもにも受容的に関わることができ、逆に自身の母親との関係において不信感を持ち、情緒的信頼を持てない被養育経験を有していると、ネガティブな自己像を持ち子どもとの関係において、情緒的な関わりや過保護・母子孤立といった不安定で一貫性のない関係が見られた、と述べている。つまり、母親自身が体験した被養育経験が、世代を超えて現在の自分の子どもに対する養育態度を規定する可能性が高いことを示している。しかし、それは絶対的なものではなく、親子を取り巻く環境や母親自身の気持ちのありようで、世代間伝達の連鎖を断ち切ることは可能であることも示されている。子育てで悩む母親への支援において、現在の母親の姿だけではなく、母親の被養育経験や母親を取り巻く環境を視野に知れたサポートの必要性を指摘している。

また、山口（2008）も、大学生を対象として、その回想された両親との養育態度認知が、現在の愛着表象にどのような影響を与えているかについて検討している。その結果、就学前における両親の愛着スタイルが肯定的であるほど、現在の対人関係において、他者への親密性回避や見捨てられ不安は低くなるということが示された。また、一般他者への親密性回避が高くなるほど、現在の対人関係における友人・恋人への親密性回避や見捨てられ不安が高くなるということを明らかにしている。つまり、回想された両親の養育態度によって、青年期にある大学生の IWM にも影響を及ぼし、現在の対人関係、特に友人や恋人との関係にその両親の愛着スタイルが影響を及ぼしているということである。

この田邊らや山口の研究は、多数の母親や学生を対象とした世代間伝達を理解する実証的な研究であるが、数井らの研究でも触れられているように、その測定 of 厳密さということについては、母親の表象としての IWM がどこまで正確に把握されているかはやや疑問が残るところであり、いずれも“回想された親の養育態度”というものを扱っている。また田邊らは子ども自身の IWM は測定されておらず、子育てへの母親自身の内省的な意識ということで、測定されており、それが子ども本来の IWM をどこまで示しているかは、検討の余地があると考えられる。

3. IWM の臨床的な活用

IWM の臨床的な実践への活用ということで、高橋ら（2008）の神経性食欲不振症の母親に対する面接調査がある。高橋らの研究は、IWM そのものを扱った研究ではないが、現在までの母子関係及び神経性食欲不振症という病気の発症や経過に対して、母親自身の被養育体験がどのような影響を与えているかを見ようとしたものである。半構造化面接による聞き取りから、「長女を無意識的に自分の母親と見立てて自分の傍らにいさせることで、依存欲求を充足させようとしていた」とあるように、様々な形で摂食障害を抱えた母子において、依存と自立をめぐる葛藤が代々伝達されていることを示している。さらに、そのインタビューにおいて、子どもとしての母親の中に潜んでいた葛藤を実母に訴えてみたが、受けられなかったというエピソードも報告されている。しかし、そこで大切なのは、「受け入れられなかった」ということではなく、それでさらに苦しむのではなく、それは現実として理解し、

その思いを親に訴えることができたということが意義のあることであり、それまで無意識に伝達されていた葛藤が、そのことで少し意識化され、ストップする可能性があり、世代間伝達における臨床的な介入の可能性も示唆するものである。

さらに、金子ら（2008）は、母親の抑うつと愛着関係についての縦断的な研究を行い、抑うつ的な母親は、胎児及び乳児との愛着形成においてリスクとなることを示し、その支援の方向として、母親への両親からのサポートの重要性を指摘している。また、烏丸（2007）も不安定な愛着関係が、後の抑うつ発症につながる可能性について検討し、その実証的な研究はまだないが、これまでの研究を概観し、理論モデルの必要性を提唱している。臨床的には、母子の二者関係が基本であるが、それを超えて「複数の重要な他者との人間関係」による影響、変容について検討していく必要性を述べている。これについては、内田・山口（2003）の研究においても示唆されるところであり、今後さらに詳しい検討が必要である。

また、臨床実践としては、若葉（2003）による吃音の児童との治療過程や工藤（2004）による心理アセスメントにおける IWM の利用についての報告がある。工藤は、「愛着スタイル概念は、面接における治療者との関係を予測し、また個人が抱える問題や主訴の背景についての理解を助ける」という点より、見立てにおけるモデルとして利用できることを指摘し、愛着スタイルのそれぞれの語りの特徴について抽出している。このような視点は、今後心理面接におけるアセスメントや面接過程の理解において有効になってくると考えられる。芳野（2003）は、摂食障害の母子における世代間伝達の問題を取り上げ、その支援においてセラピストが *secure base* として機能することの意義について述べている。しかし、その具体的な介入方法については、述べられておらず、心理臨床における面接過程そのものを IWM の視点から考察した事例はまだ少なく、今後の研究が期待される。

6. おわりに

以上、見てきたように現在 IWM の研究はさまざまな方面で発展しているが、その実証的な研究はまだまだ少ないのが現状である。特に、IWM の測定については、海外で実施された道具がそのまま日本という異なる文化・社会においても使用可能であるかというのは、大きな問題であり、IWM との関連やその変容を述べる際にも、どのような測定方法によって実施された研究であるかを見ていく必要がある。さらに、実践的な報告として虐待や摂食障害のケース、また発達障害のある子どもの母子への支援など、少しずつなされるようになっているが、それはまだ事例報告という段階であり、IWM を基礎とした事例の見立て、面接の方針、具体の介入、事例全体の流れなどを詳細に考察したものは少なく、今後 IWM の視点から考察した事例研究が積み上げられていくことが望まれる。さらに IWM の変容や愛着の視点からの支援ということに関しては、母子関係が中心ではあるが、その母親自身を支える方向からの支援として、“母親の語り”という視点からのサポートが重要になると考えられる。さらに母親を取り巻く環境として、父親やセラピストも含めた“重要な他者”との関係性という視点も重要である。

引用文献

- 伊藤英夫 (2002). 自閉症児のアタッチメントの発達過程. 児童青年精神医学とその近接領域 43 (1), 1-18.
- 上田七生 (2002). 乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に—. 広島大学大学院教育学研究科紀要第3部, 51, 359-363.
- 内田利広・山口美穂・河合三奈子 (2003). 内的作業モデルに関する文献展望と今後の課題— IWM 研究の臨床領域への活用に向けて—. 京都教育大学紀要, 103, 111-128.
- 山口美穂・内田利広 (2003). 内的作業モデルの変化とその要因についての研究—「重要な他者」と「自己関係」との関連から—. 第20回日本家族心理学会発表抄録集
- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment: A psychological study of the situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する. (数井みゆき・遠藤利彦 (編), アタッチメントと臨床領域). ミネルヴァ書房, 1-58.
- 大石佳世子・小林康江 (2006). 青年期における親になることに対する態度の構成要素と内的ワーキングモデルとの関連. 山梨県母性衛生学会誌, 5, 64-69.
- 岡島泰三 (2008). 内的作業モデルの変化に関する研究の展望と今後の課題. 臨床教育心理学研究, 30, 33-39.
- 尾崎康子 (2003). 愛着と気質が母子分離に及ぼす影響— 2.3 歳児集団の継続的観察による検討—. 教育心理学研究, 51 (1), 96-104.
- Carlson, E.A. (1998). *A prospective longitudinal study of attachment disorganized/disorientation*. Child Development, 69, 1107-1128.
- Carlson, E.A., Cicchetti, D., Barnett, D., & Braunwald, K. (1989). *Disorganized/disoriented attachment relationships in maltreated infants*. Developmental Psychology, 25, 525-531.
- 粕谷貴志・昆 保典・六本木郁子・安藤拓也 (2003). 幼児の愛着タイプ評定項目作成の試み. 日本保育学会大会論文抄録, 56, 702-703.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48, 323-332.
- 数井みゆき (2007). 子ども虐待とアタッチメント. (数井みゆき・遠藤利彦 (編), アタッチメントと臨床領域). ミネルヴァ書房, 79-101.
- 烏丸佐知子 (2007). 抑うつに関する内的作業モデル研究の展望. 京都文教短期大学研究紀要, 46, 139-148.
- 金子一史・本城秀次・村瀬聡美 (2004). 母親から子どもへの愛着形成—心理社会的検討—, 小児科臨床, 57: 1273-1279.
- 金子一史・野呂健二・田中伸明・瀬地山葉矢・高橋靖子・村瀬聡美・本城秀次 (2008). 母親の抑うつと母親から子どもへの愛着に関する縦断研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 49 (5), 497-508.
- 加藤孝士 (2007). 養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連. 発達心理学研究, 18 (3), 185-195.
- 工藤晋平 (2004). 「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント. 心理臨床学研究, 22 (4), 406-416.

- 久保田まり (1993). 絵画統覚検査による幼児のアタッチメントの内的ワーキング・モデルに関する基礎的研究. 秋田経済法科大学経済学部紀要, 17, 41-54.
- Crowell,J.A.,Treboux,D.,&Waters,E.(2002). Stability of attachment representations:The transition to marriage. *Developmental Psychology*,38,467-479.
- 狗巻修司 (2007). 自閉症幼児の他者理解の発達と療育上の留意点: 愛着対象の形成に焦点をあてて. 福祉社会研究, 7, 107-121.
- 桂田恵美子 (2005). 幼児の攻撃行動と愛着: 母親の養育行動との関連. 人文論究, 55 (2), 75-93.
- 榊原美紀・別府哲 (2005). 複数の大人と安定した愛着関係をもつことに困難を示した自閉症児の愛着行動と他者理解の障害と発達. 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 54 (1), 241-258.
- 島義弘 (2007). 青年期の愛着と Big Five-日本人サンプルでの検討. パーソナリティ研究, 16(1), 121-123.
- 嶋田美由紀・田中雄三 (2005). 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響. 鳴門生徒指導研究, 15, 16-29.
- 鈴宮寛子・山下洋・吉田敬子 (2004). 保健機関が実施する母子訪問対象者の産後うつ病全国多施設調査. 厚生学の指標, 51 (10), 1-5.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 高橋歩美・辻河昌登・高宮静男・植本雅治 (2008). 神経性食欲不振症の子どもをもつ母親の語りからみた世代間伝達の問題. 発達心理臨床研究, 14, 155-167.
- 田邊恭子・米澤義史 (2009). 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 19-28.
- 辻野順子・雄山真弓・田摩 みつ子 (2008). 子どもの問題行動と母親の愛着との関連性, 並びに子どもの問題行動に対する母親評価と保育士評価の相違点について. 関西女子短期大学紀要, 17 : 1-9.
- 土井靖子 (2003). 施設における被虐待児への治療的介入の心理学的考察—「特定の他者」との関係性における愛着の視点より—. 児童学研究 (聖徳大学児童学研究紀要), 5, 115-125.
- 中内結美子 (2006). 青年期における相互自律性と愛着スタイル. 帝塚山学院大学大学院人間科学研究科, 10, 53-65.
- 中尾達馬・加藤和生 (2001). 成人の愛着行動とはどのようなものか?—女子大学生の自由記述の内容分析を通して—. 九州大学心理学研究, 2, 99-106.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. 心理学研究, 75 (2), 154-159.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. パーソナリティ研究, 13 (2), 156-169.
- Bartholomew,K.,&Horowitz,L.M.(1991) ,Attachment styles among young adults: A test of a fourcategory model. *Journal of Personality and Social Psychology*,61,226-244.
- 笛吹素子 (2003). 母親の愛着形成に関する研究—出産形態と環境因に着目して—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 50, 330-331.
- 藤岡孝志 (2003). 愛着障害の子ども及びその親への修復的愛着療法に関する研究. 日本社会事業大学研究紀要, 50, 97-120.
- Fraley,R.C.,& Shaver,P.R.(2000), Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory:

- Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 816-826.
- Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. Pp.46-76.
- Prior, V. & Glaser, D. 加藤和生 (監訳) (2008). 愛着と愛着障害. 北大路書房
- 別府哲 (1994). 話し言葉を持たない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. 教育心理学研究, 42, 156-166.
- 別府哲 (2007). 障害をもつ子どもにおけるアタッチメント. (数井みゆき・遠藤利彦 (編), アタッチメントと臨床領域). ミネルヴァ書房, 59-78.
- Bowlby, J. (1969/1982), *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. 黒田実郎他 (訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1973), *Attachment and loss. Vol. 2. Separation*. New York: Basic Books. 黒田実郎他 (訳) (1977). 母子関係の理論 II 分離不安. 岩崎学術出版社.
- 宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香 (2001). 女子大学生の内的作業モデルと家族表象—家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として—. 東海女子大学紀要, 21, 67-77.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-106.
- 山川賀世子 (2005). 愛着の発達不全—D タイプの検討. 臨床発達心理学研究, 4, 13-22.
- 山川賀世子 (2006). 幼児の愛着の測定—Attachment Doll Play の妥当性の検討—, 教育心理学研究, 54 : 476-486.
- 山上雅子 (2007). 自閉症スペクトラム障害と愛着研究の進歩. 発達教育学研究, 1, 15-27.
- 山岸明子 (2004). 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連. 発達心理学研究, 15 (2), 195-206.
- 山口倫子 (2004). 愛着度と情緒関係からみたパラサイト・シングルと親子関係. 甲子園大学紀要 現代経営学部編, 32 (B), 155-168.
- 山口正寛 (2008). 回想された両親の愛着スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, (2), 1-9.
- 芳野道子 (2003). 愛着の世代間伝達—内的作業モデルとその内なるものへの癒し—. 家族問題相談研究, 2, 55-67.
- 若菜陽子 (2003). 不十分な母子愛着関係と強い心理的不安が発達の基盤となった幼児吃音の治癒過程, 特殊教育研究施設研究報告, 2, 59-69.
- 渡辺久子 (2000). 母子臨床と世代間伝達. 金剛出版.